

な集団生活を送ることによる感染機会の増加から、感染症が主な死亡原因になったと論じている。

更に工業時代に入ったここ三世紀間の急激な人口増加の原因は、死亡率特に感染症による死亡率の低下にあるとした。その理由として、農業生産の上昇による栄養状態の改善の結果としての抵抗力の増加と、水道・食品管理などの衛生設備の向上による感染機会の減少を挙げているが、その一方で健康改善の代償として、がんや心臓病などの非伝染性疾患が増加し、現在に至っていると述べている。

著者は、精神の病気を除く様々な人間の病気を、出生前の受胎成立時点や胎生初期に起源のある遺伝病、十分な食糧が食べられないことに起源する貧しさ病、食糧は十分なのに公害など生活環境が悪化したことによる健康への危害や、喫煙・飲酒・運動不足といった生活習慣に起源する非伝染性疾患である豊かさ病に分類し、その制御の処方箋を述べている。

要するにこの本のおもしろさは、病気の起源を医学用語でも専門用語でもない、しかも相対立する概念である「貧しさ」と「豊かさ」で分類したというところにある。しかしながら、その言葉の持つ経済学的意味からの分析が重ねられていないために、医学以外の領域からの評価が気になるところでもある。

(網野 豊)

(朝倉書店・東京都新宿区新小川町六一二九、☎〇三・三二六〇・〇一四一、一九九二年十月刊、A5判、二二六頁、三七〇八円)

吉田直哉著

『私伝・吉田富三 癌細胞はこう語った』

故吉田富三教授の長男、吉田直哉氏(武蔵野美術大学教授)による吉田富三伝である。

以下、「吉田教授」と書くのは、お父さんの方、つまり富三先生のことである。

本書を知ったのは、並木恒夫博士(国立仙台病院)が年賀状(一九九三年)で「十二月に吉田富三先生の伝記を二冊よみ、大変感激した」と教えてくれたからである。私はかれに葉書を出して書名を尋ね、かれは、本書と永田孝一「吉田富三伝、流動する癌細胞」(講談社)をあげて、さらに北村四郎「激動の中を生きて」(考古堂書店)もぜひ読むようにとすすめてくれた。

私は読書家ではないので、三冊も教わってひどく大儀になったが、とにかく買っておくことにした。そこへちょうど、医史学会から本書の書評を求められたのである。

本は学会が貸して下さったが、その本には吉田教授の郷里、福島県浅川町の町長さんの手紙がついていた。それによると、浅川町では「ふるさと創生事業として吉田富三博士の顕彰事業を推進しており」、その内容は、記念館の建設、がん撲滅運動など、「この伝記もその一環として発刊された」とある。

「創作と創造はちがう」と著者に父・富三氏が語るところがあるが(二〇一頁)、平成の世に「創生」という言葉が使われ、

自らが、没して後、郷土の誇りとしてその事業の主人公になることまでは、いくら富三先生でも予想できなかったに違いない。

吉田教授の母堂が立派な方だったようだ。「この母が義齒といふものを嫌った」(五八頁)というくだりがあるが、晩年の教授が「静観待機・医事不如自然」(二三四頁)を説いたその思想を、母堂がすでに平明な言葉で語りつくされていると思う。

思い出がある。一九六二年の六月だったと思う。札幌で病理学会があって、私は松本武四郎教授(東京女子医大、当時)と同行したが、同じ車両に吉田教授が乗っておられた。吉田教授は、手にされていた印刷物を私たちに示し、息子が書いた脚本だ、といわれた。直哉氏の名はすでに有名だった。吉田教授の顔には、出来のいい息子を持った父親の誇りと安らぎがあった。本書の最初で、その直哉氏が「還暦を過ぎた」と、自ら語られるのを読んでいささか驚いた。昔、ドイツ語の Generation には三十年という意味がある、と教わったが、本当に三十年すると世代が変わる。こんどはその出来のいい息子が、完璧な人生を生き切った父親を、誇りと安らぎをもって語るのだ。

つまり富三氏の一ばん身近にいた著者が、講演や著作、ノートから自在に引用し、貴重な家族の観点も加えて、故人の全貌を一書にされたのである。ここで全部を紹介することは出来ない。研究史を扱った第五、六章には、吉田教授自身の

言葉で、吉田肉腫から腹水肝癌、癌化学療法の研究という道筋が詳しく辿られている。私も勉強になった。

もつとも感動的なのは、この著者、直哉氏が取材・出張先のメキシコで父・富三氏の死を知り、臨終の席に居あわせなかった不運を嘆かれる一節である(二七九―二八二頁)。「吉田家の人々」は、まことに美しい品性に恵まれている。

本書の性質上、触れていないが、私はこの機会に、発ガン物質の研究史、吉田時代の病理学史、とくにレスレー・Rose のことなど、資料を調べて加えようと思った。しかし紙数も時間も制限がある。またの折にしたい。

ただこれだけはいっておこう。「顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家」(三八頁)は、これは著者の「作業仮説」(一四二頁以下)だろうが、これはよくないと思う。せめて「最後の」にして欲しい。「最後の」といえば後の人は奮起するだろう。怒(いか)る人もいるだろう。しかし「最初の」といったら、吉田教授より先に世を去った人々はどうなるか、奮起のしようがない。歴史に対するこんな見方が通用したら、医学など意味を失う。

(梶田 昭)

〔文芸春秋、千代田区紀尾井町三―三三、電話〇三―三二六五―
二二二、一九九二年、A5判、三一〇頁、一六〇〇円〕